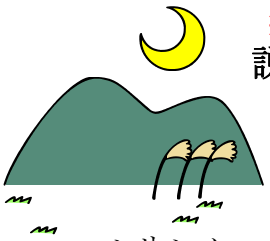

※説教要旨であるため“わび茶”についての記述は省かせていただいています。

説教要旨　「わび茶とキリスト教」

ルカによる福音書１３章２２～３０節

エルサレムへ歩みを進めるイエス様に、ある人が「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」（23 節）と質問をしますが、イエス様はこの質問にはイエスかノーかでは答えずに、「狭い戸口から入るように努めなさい。」（24 節）と言われました。

救われる人数の多寡を尋ねるこの質問の根底には、救われる人の数が学校の入試の様に定員が決まっていて、その定員に入るために他の人々と競争をしてでも勝ち抜いて救いにあずかろうという思いがあります。イエス様は、救われる人が多いか少ないかということを気にする前に、自分自身の問題として、救いのことを考えるように促しておられるのです。

学校の入試の定員のように、救われる人の数が決まっていて、その定員に入ろうと競争をするようなものではないのです。定員オーバーになるから神の国に入れなくなることはありません。ただ単純に入り口が狭いために、体が大きいとそこに入れないのです。神の国の入り口は探さずとも目の前にあるけれども、その入り口が狭くて入れないために、大きな体のままで入れる別の入り口を探してさまようのが私たちの姿なのです。

イエス様は私たちすべての者を、神の国へ、神の救いへと招いてくださっています。しかしこのイエス様の招きを、神様の救いを当然与えられるものだと高を括ってはいないでしょうか。本来、私たちは扉を閉ざされて当たり前の罪人なのです。「おまえたちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」（27 節）と突き放されても仕方ないのです。にもかかわらず、神様はただ憐れみによって、イエス・キリストという救いの道を示してくださったのです。

誰もが招かれている神の国での宴には定員はありません。「そこでは後の人で先になる者があり、先の人で後になるものもある。」（30 節）のです。その宴の席に他の人たちがいくら座ったとしても、あなたの席が足らなくなることはありません。互いに譲り合い、ちいさい者、弱い者が大切にされる神の国の宴に私たちは今、招かれているのです。

（２０１９・９・２２　説教者：稲垣真実）